オーディオは悩ましい 60

原島一男

置時計とオーディオ接点クリーナー

7月12日（日曜日）

梅雨の最中だというのに，あまり雨が降らない．台風が近づいているからか，天候は安定しない．そんな蒸し暑い日の午後，東京・渋谷のBunkamuraオーチャードホールで「悲愴」を聴いた．「悲愴」をこうして聴くのは何年ぶりだろう．いや，もしかして，ナマで聴くのは初めてかもしれない．マエストロ尾高と東フィル．改めて，このチャイコフスキーの6番目の交響曲の「名曲度」の高さを感じた．繰り返し繰り返し演奏されるテーマの旋律．ときには弦楽器の合奏で，ときには木管のソロで．それが聴き終わっても耳から離れない．歌心のある人なら，知らず知らずに口ずさんでしまうのだろう．私は歌心はないけれど，幸せな夏の午後のひとときだった．

1955年製の置時計．メーカーは不明

その最終楽章で，私が注目したのは舞台の一番左側の奥にいるシンバルだった．一抱えも二抱えもある大きな金属の円盤を曲の流れに合わせて鳴らすのは，さぞ体力の要る仕事だろう．そのエネルギーを蓄える必要があるためか，ブラックタイの演奏者は演奏が始まる前から定位置で腕組みをして，自分の出番を待ち続けていた．そして，本番．力を振り絞ってジャーン・ジャーンと数回！すべてが終わり，指揮者が観客の拍手に応えているときには，彼は今日の仕事は終わったとの満足感に浸っていたにちがいない．私は，アルフレッド・ヒッチコック監督のあの映画「知り過ぎていた男（The Man Who Knew Too Much 1956）」のシンバルの響きが頭の中に甦った．

7月19日（日曜日）

気象庁が関東地方の梅雨明けを告げたが，35℃前後の猛暑である．東京都心で34.8℃，群馬県館林では37.2℃．

このところ，私にとって，ほとんど動いたことのない置時計のことが気になっていた．

この時計は昭和30（1955）年に私の父親が手に入れたもの．読者の大部分はその時代を経験されたことはないだろうが，おそらく，それは今で言えば貴重品中の超貴重品の扱いを受けていた．父親は何かの記念として，その時計を贈られたもので，裏面に昭和卅一年十月と金文字で記されている．ちょうど60年経った今，なぜここにあるかは謎のまた謎ではあるが，きっと私自身が「ある決意」を持って，大切に保存してきたものだろう．いや，「ある決意」というほど大袈裟なものではなかったかもしれない．ただ，生活の流れにまかせて，その時計を持ち続けてきた．過去60年を振り返ってみると，その時計が最初に置かれた東京市谷の家から，私は少なくても3回住処を移した．引っ越しするたびに，「これを持って行こう」と決め，そうしたにすぎない．引っ越した後，落ちつくまでに家の中でどこに置こうかと迷ってあげく，玄関ということになった．そういえば，市谷でも，その時計は玄関に置かれていた．

その時計は，いわゆる「ゼンマイ」式の振り子時計で，縦27cm，横19cm，奥行13cm．四方がガラスで囲まれていて前後が開くような構造になっていて，扉を開けて，時刻を合わせたり振り子の長さを微妙に調節したりすることができる．ゼンマイは2つ付いていて，一つは時刻用，もう一つは時報用になっている．いっぱいに巻いておくと，最高3日もつが，時間が経つと時報の鳴り方に元気がなくなってくる．そろそろ巻いてやってエネルギーを与えてやろうか，と思ったりする．モノ言わぬ機械でも，ちゃんと気持ちを伝えてくるのが愛おしい．

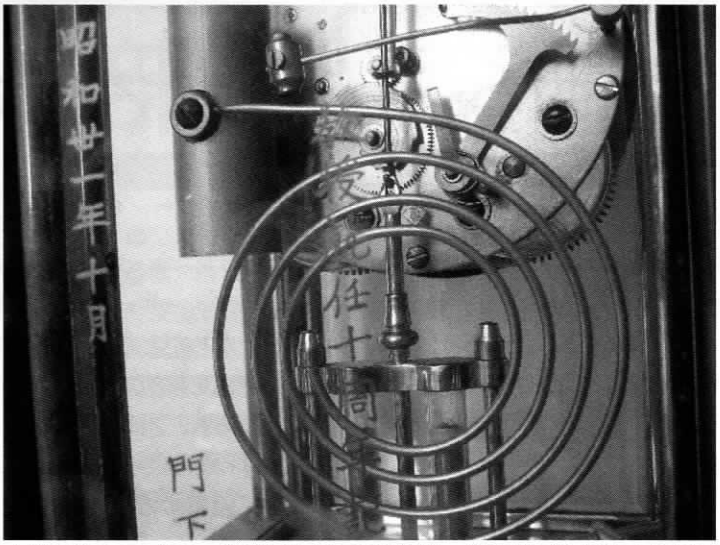
その時計は最初から不安定な動きをしていて，父親はその脚の下に紙を敷いたり角度を変えたりしていたことを思い出す．つまり，振り子が水平に保たれていることが何よりも重要だったようだ．うまく調節ができると5分くらい動くが，機嫌が悪いと停まってしまう．そういう状態だったから，その後も私はどちらかというと，その時計を「観賞用」として使っており，「実用」には遠い存在であることに痛痒を感じることなく，月日を過ごしてきたのだった．

ところが，その後デジタル時代になって，アナログ製品の魅力が再発

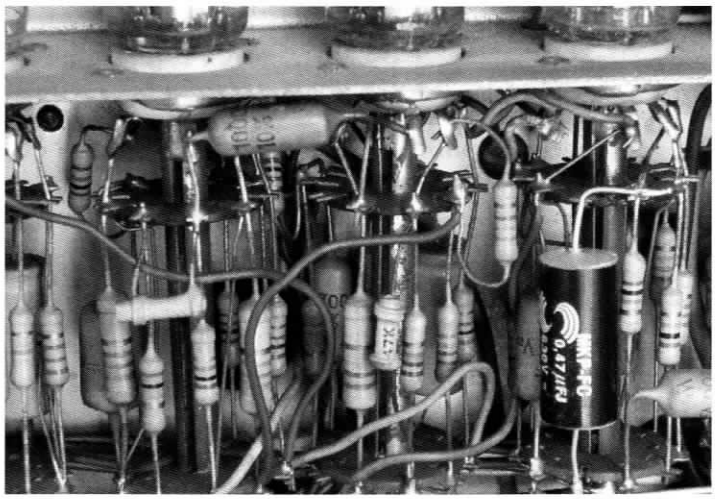
見されることになり，にわかにその存在が気にかかることになり，それを正常化して日常的に使いたいと気持ちが日に日に高まってきてしまった．

それは，MJ誌の付録に付いていたオーディオ接点クリーナー（関口機械販売製）を見たときだったような気がする．これは時計の歯車には有効に作用するのではないか，という考えが頭から離れなくなった．しかし，ナノカーボン粒子は電気誘導面に作用することはわかっていても，機械式な接触面を持つ時計の微細な歯車には，別の効果が現れるかもしれない．悩んだあげく，そのことは考えないで，裏側の扉を開けて，そこについている振り子の長さを調整するネジをいじってみた．振り子を外して，その長さを変えてみた．それだけのことだった．

ところがところがである．それまで，５分も保たなかったこの時計が，１時間以上も続けて動くようになった．ただ，振り子を外して長さを変えただけなのに．祈るような気持ちで，その夜，眠りについたが，夜中に耳を澄ますとボーンボーンという音が聴こえる．これはうまくいくかもしれない．



左側の筒とスプリングが共鳴する時報装置．半時間ごとに驚くほどの大きな音でボーンボーンと時を知らせる


ルボックス G36の配線部分

７月20日（月曜・祭日）

「海の日」．神奈川県の江ノ島水族館では，この週末から初めて「デジタル化」が始まったという．テレビで観ただけだが，ここでは，デジタル処理技術を使って，自分で描いた魚の絵をスキャンして目の前の水槽で泳がせたり，水槽の中で泳いでいる魚の表面に花びらの模様をつけたりするサービスが人気を呼んでいる．

ひさしぶりで動き出した時計のことで，すっかり気を良くした私は，手持ちの旧いオーディオ製品にこの接点クリーナーを作用させて「奇跡」を起こさせようと考えた．

接点クリーナーの効果が出るのは，それをつけてから何日もかかると聞いているが，このコラムでも紹介したルボックス　G36を実験に使うことにした．３モーター３ヘッドのオープンテープレコーダーの重さは20kgもあり，軽薄短小の今では信じられないほどだ．やっと机の上へ持ち上げて，裏板を外して全部のミニチュア管の脚の一つ一つに綿棒でクリーナー液をつけた．それから，配線されている抵抗やコンデンサーのハンダ付け部分に同じようにクリーナー液を擦りつけた．ヴォリュームや切り換えロータリーSWの接点にもまんべんなくつけた．これだけでも１時間以上かかる大仕事だった．音量を調節するヴォリュームが，ガリガリいうので，ここには，隙間のところへスプレー缶から直接液を吹きつけた．

さあ，どんな結果をもたらすことだろう．MJのライター諸氏は，その効果を褒め讃えているけれど，この場合にはどのように作用するのだろうか．その結果がはっきりと出るのは，この暑さが和らぐときだろうか．それとも，次に電源を入れたときか．

歳を重ねて来ると，急にこれまで気がつかなかったことに気がついてみたり，見えなかったものが見えるようになる．小さなことだと思っていたことが，実は大変重要なことだったり，自分では気になってたまらないことが，些細な取るに足らないことだったりする．まあ，それも老人になった証拠の一つか？

（隔月連載）